高齢化社会をよくする女性の会会報

No.63　1993年4月発行

高齢化社会をよくする女性の会
東京都新宿区新宿２－９－１
第31宮庭マンション802号室
ＴＥＬ.03－3356－3564
ＦＡＸ.03－3355－6427
郵便振替　東京0-79477

スウェーデンへ向けて、いざ出発！

―目　次―

セミナーツアー報告①……1～8
男・老いを語る㊳井沢元彦氏……9
グループ紹介……10
リレー・エッセイ⑦上野千鶴子氏……11
本の紹介・事務局だより……12

■設立一〇周年記念――スウェーデン、アメリカ

「女と老い」をめぐる セミナーツアー報告①

スウェーデンの社会福祉は、コミューンの独立採算制

岩崎恒子

三月二十三、二十四日

三月二十三日、成田より十一時間余りの空の旅を終え、スウェーデン・アルナンダー空港に着く。機内より見下ろしたあちこちの湖は凍っていたが、外は思ったほど寒くない。二階建てのバスに乗り三〇分ほどでストックホルムの旧市街に着いた。

六〇年かけて造られ一七五四年に完成したという王宮では、ちょうど衛兵の交代式を見ることができた。スウェーデン王室は、十三年前に第一子が王位継承者となるように定められ、次は女王様となる、との話に日本の皇室典範が話題となった。古い教会や民家の建つ町並みを、石畳の感触を楽しみながら、ホテルへの道を歩く。ホテルでは、先発組の樋口代表と沖藤さんに迎えられ全員集合となる。

三月二十四日

ストックホルム市庁舎で、ストックホルム市国際部情報部長バルバラ・オウル氏のレクチャーを受ける。

日本からの視察はずっと男性が多かったが、このところ女性が目立ち、男女平等が進んで嬉しい。身を持って女性のパワーを感じている、と女性としてのオウル氏の感想のあと、社会福祉のインフォメーションが始められた。

スウェーデンの社会福祉は、日本の市

町村にあたるコミューンの独立採算制となっている。コミューンの中の市民は、空腹や病気などから守られる。国に、社会福祉法という大黒柱があるが、デコレーションは市町村の役割で国が規制することはできない。

ストックホルム市議会は九つの党から一〇一名の議員が選ばれており、そのうち女性議員は四八名を占めている。市の予算のうち、五四・五パーセントが社会政策費、うち二四・七パーセントが老人福祉費に充てられる。現在、スウェーデンの高齢化率は一八パーセントで、これは今のところ世界一である。ストックホルム市では六五歳以上が二二パーセントを占めている。

高齢者ができるだけ在宅で暮らせるよう、六五万の人口に対して五千人のホームヘルパーが活動している。老人の一一パーセントが何らかの形でホームヘルプサービスを受けて暮らしていて、高齢者は特にヘルパーを必要としている。ケースによっては一日に三回以上ヘルプを受け、夜のケアも必要となっている。老人たちの電話を受ける電話サービスは、二四時間体制で夜中も対応、他に緊急連絡、緊急ベルへの対応に、緊急センターが、やはり二四時間体制であたっている。

ホームヘルパーのサービスには、生活の必要以外に同伴サービスもある。レストランや劇場へ同伴してもらえ、自分の分は自分で払い、ヘルパー分は市が払う。交通機関としては、全タクシーの半分が車イス対応。そして車イスのマークのついたバスもある。ホームヘルプサービスは有料で、回数や収入により毎年そのサービスに応じた費用が決まる。

在宅が難しい状況、例えば住宅にエレベーターがないとか、薬を飲むのを忘れるなどの場合、老人住宅に住み、そこでもホームヘルプサービスを受けることができる。六〇年代に、かつての老人ホームは非人間的であったとしてサービスハウスが造られたが、後期高齢者が増加し、老人ホームがもう一度必要となってきている。サービスハウスには医療サービスがないので、新しい老人ホームを欲している。今は、サービスハウス建設はストップされている。景気のいい時に拡げ過ぎた社会福祉を合理化していこうとしてきているが、景気が回復して高福祉ができることを望んでいる。

若い人の中では、先ゆきの年金不安から、民間の年金保険に入る人もあるが、多くは、安定した政策があるなら税金を払ってもいい、と考えている。

ノーベル賞の祝賀パーティーも催されるという市庁舎で、一時間半のレクチャーのあと、三グループに分かれてサービスハウスへ行った。私のグループが訪問したのは、タントサービスハウス。普通の

毎日おシャレをして、生き生きした表情のグループホーム（ストックホルム）の方々

アパートと同じ老人住宅、痴呆症のグループ住宅、デイケア・シックホーム、地域の老人センターなどの各機能がこのサービスハウスに入っている。

痴呆症のグループ住宅には六人の老人が住んでいて、スタッフ一〇人が三シフトで対応。オムツをしているが、マンパワーの充実とオムツの改良でにおわない。スタッフは残された機能を活用するようしむけている。

シックホームは最終ステーションとなる。ベッドは電動で上下し、働く人の負担を軽くするようになっている。寝たきりにさせないように、パジャマを着替えさせる。車イスに移るためのリフトがあり、ツアー参加者の一人がこれに挑戦、乗り心地がよかったとか。

老人住宅のマイさんの部屋を訪問。二DKで六二平方メートルあり、普通のアパートと同じ型式だが、スタッフがいるので安心して暮らせるそうだ。

お昼はここのレストランで、ビール付き食事。お年寄りもビールを飲みながら食べていた。

三月二十五日

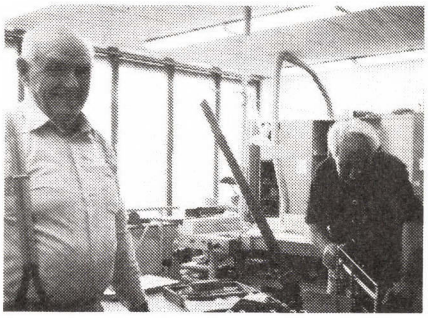
女性議員のパワーが、福祉向上に貢献

末包房子

C：Skinnarviken Service Hus

サービスハウスの説明を、マリヤさんから聞く。このハウスは不動産会社所有の物をストックホルム自治体が借用。入居者は一三〇人で地域の人も自由にレストラン等を利用することができる。

医療は県、看護婦は自治体の分担で医者は週に一回来る。ホビールームでは、ダーラナ地方特産の見事な木工製品を作っていた。



ストックホルム・デイセンターで楽しそうに工作している高齢者。

空室になっているハウスを見たが、三DKで五五平方メートルの眺望の素晴らしい居室だった。

エバ・ブリッタ・パールクヴィストさんの話

仕事の内容は、自分のことができる自宅に住む人の世話で、毎朝スケジュールを組み、十八年間地域で働いてきた。現在ホームヘルパー・アシスタント。老人に必要なサービスを判断する人がいて、そのサービスが商品となり、代償を貰う。マリヤウーガリ地区には判断する人が九人、ヘルパーの詰所二五か所。

ヘルプの内容は、掃除・洗濯・入浴・買い物・じょくそうや足の手当て・炊事・税金の申告等。一二人で七一人の世話をしている。

老人の全員がアラームシステムを腕につけているので、緊急の場合に押せばセンターに通じる。

＊

女性国会議員レクチャー

May Inger Klingvall

〔社民党国会議員〕

スウェーデンの国会議員＝三四九名

女性議員　三二・七％

男性議員　六七・三％

他の国と比べて、女性議員のパワーが福祉を良くするために貢献している。

一九〇〇年当初から女性議員がいた。

年　金

六十五歳から全国民に基礎年金が支払われる。

人口八五〇万人のうち八〇万人が年金を貰っている。その外に付加年金として、給料の七五％が支給される。

高齢化率

一九五〇年　一〇％

一九九二年　一八％

二〇二五年　二一％

社会福祉法

子供・若者・貧者・老人がどこのコミューンに住んでいようと、快適な社会を自治体が提供するということが柱になっている。

(1)国は法律を作成

(2)県は医療・交通・道路の整備

(3)コミューンは福祉の責任を受け持つ

昔は老人ホームしかなかったが、現在はいくつもの自分の老後生活の選択肢がある。

三～四十年をかけて、住宅造りのため改築費は公的負担でやった。総ての住宅が数百年持つような家造りになっている。住宅政策のおかげで八十歳以上の六〇％の人が在宅生活をしている。在宅政策のために都市計画も重要問題で、医療機関やショッピングセンター、交通機関が近くにあるということも配慮している。交通サービスとしては、低料金の赤いバスが巡回しており、このバスも利用できない老人にはバスと同一料金でタクシーが使える。これは、二十年程前にできたシステムだ。八十歳以上の人の大多数がこの制度を利用している。

ホームヘルパー

八十歳以上の高齢者の半分は、ホームヘルパーの援助を受けている。仕事の内容は様々。ヘルパーに支払う料金の九〇％は公が負担し、残りの一〇％が個人負担。

訪問看護制度

在宅で人生の最後を迎える老人のために、二四時間看護体制で援助を行う。緊急時のために腕時計型の安全ベルのシステムが採用されている。

サービスハウス

総合的センターの役割がある。一九六〇年代までに造られた老人ホームを解体してサービスハウスとした。自力で在宅生活が困難な人が入所し、孤独にならないですむだけでなく、自分のプライベートなスペースも確保できる。

グループハウス

個室は寝室だけで三食・ケア付きで老人ホームの規模を小さくしたもの。

今後の快適な住まいとしては、グループハウスが増加するだろう。

スウェーデン・グループホームの居室

三月二十六日

老人介護を労働としてシステム化し、女性の就業率をアップ

佐橋紀子

この日は、一日中ホテルで二人による講義を受けた。午前九時からはスウェーデン財務次官補長期財政展望担当のグンナー・ウエッターベルグさん(三十九歳)と午後一時からは女性団体フレドリカ・ブルーメルの書記ウラ・ゴードフォス・クリスチャンセンさん(四十六歳)である。

事前学習でスウェーデンでは、政治家や公務員に女性が多いこと、三十～四十代の若い人たちが国の政策決定の重要なポストに就いていることなどは、すでに学んでいた。

私たちの目の前に現われたグンナーさんも、日本の大蔵省にあたる部署で重責を負っている人だが、その若々しさと物腰のやわらかさで人を魅了する。

スウェーデンでは、一九六〇～七〇年にかけて女性議員が多くなったが、それは労働市場に女性たちが進出し始めた頃と一致している。

(ちなみにスウェーデンは三二・七%、日本は二・三%である)

女性の就業率アップのために「三つの決定」がなされた。

一つは税制の問題で、同一課税から分離課税になり、二つには育児休暇または両親保険で一二カ月の育児休暇は有給となった。

三つには保育園の充実で、一八カ月たてば子どもたちは皆、保育園に入れる。

老人介護の社会化が就業率アップの鍵

一二カ月間は育児休暇をとり、保育園へは一八カ月で入園する子が多い。

その間の六カ月は、ためておいた休暇等を消費することでつないでいく。

やはり、子どもの小さいうちは、親のそばにいるのがいい、との考え方だそうである。

現在では共働き家庭が一般化し、女性の八五%が就労している。

〈職場と家事〉(一九八四年)

男　五七・九時／週　女　五五・五時／週

仕事　三九・八時／週　二三・七時／週

家庭　一八・一時／週　三一・八時／週

しかしながら、週労働時間をみると、女性は男性よりも一六・一時間少なくなっている。

また家庭に費やす時間をみると、女性は男性よりも一三・七時間も多くなっている。

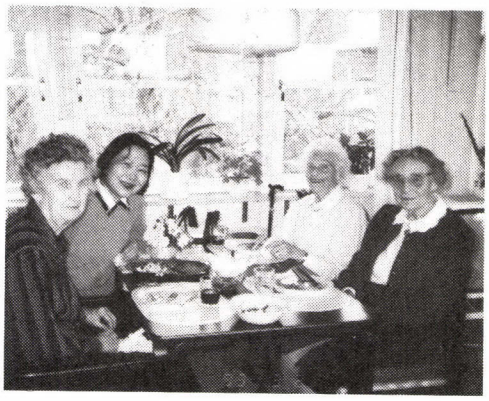
やはり、男性に家事参加させるのは、どこの国でも難しいとみえる。

女性が家庭に多くの時間を費やす分だけ賃金も低くなり、男性を一〇〇とすると、女性はパートを含めると六〇となっている。

女性の就労を継続させるために不可欠なものは、育児と老人介護の社会化である。

両親手当をはじめとする手厚い出産・育児政策のおかげで、出生率も二・一に上昇し、子どもも一八カ月になれば、保育所入園もみな可能となった。また老人介護についても、一九五〇年代には、家庭で女性が老人を看ていたが、介護を労働としてシステム化することにより、一〇人の老人を三人のヘルパーが看ることで、七人の女性が働くことが可能になり、家庭から解放された。

最後に一九七〇年からGNPは一～二%どまりの低い成長となっているが、「これだけの福祉の成長をしながら、マイナス成長にならないことこそ評価すべきだ。それには女性の労働力が大きな力になっている」と述べた、グンナーさんのことばが印象的であった。



おしゃべりを楽しみながらの食事タイム

午後のウラさんは三人の子どもがいるが、離婚により、上の二人は父親と暮らしている。

現在十三歳の娘と二人暮らしだが、もし「幸福な離婚」ということばがあれば、私たちはそれにあたる、とくったくがない。

日本の場合、離婚や未婚の母などの事実は、胸を張って喋れるような状況にはなっていない。平等と人権思想の厚みと広さに圧倒された。

ウラさんはフレドリカ・ブルーメルの書記である。

一八八四年設立のこの女性団体は、会員三四〇〇人を擁し、男女平等に関する活動をしている。

この団体は、どこの政党にも属さず、自分たちの意見をとり入れてくれる政権と結びついて運動してきた。政党と話をするためには、常に学習が必要である。

一九六〇年の黄金時代に作られた福祉政策は、今、転換期にさしかかっており、不況の中で、最初にクビを切られるのは女性である。

しかし、働くよろこびを知った女性は、もう家には戻れない。今後の活動が期待される。

男女賃金格差が縮まったのは七〇年代。八〇年代から格差が広がり始めたが、その要因は①賃金の契約体制が変化し、男性ほど上手に自分を売りこめない女性が不利になったこと。②物を生産する仕事の方が賃金が高いこと。女性に多い対人間の仕事は評価が低いことなどが考えられる。

世界的規模での不況下のなかで、スウェーデンでも経済中心、金持ち優遇をよしとする自由主義社会の実現をめざし、大幅な福祉後退がなされようとしている。その保守政治にはっきりノーといえるのは女性しかいないといわれ、女性党誕生のうねりもあるとされている。今後、フレドリカ・ブルーメルのような女性団体の担う責任は大きくなるばかりであろう。

三月二十七日

高齢者と障害者がふつうの生活を送れる社会の実現を

村岡洋子

今日は土曜日ということもあって、終日ホテルでレクチャー。おまけに朝食前の一時間を、遅れていたお互いの自己紹介に充て、午後の部の終了時（ほぼ十六時の予定）から、夕食までの一時間を、各班毎に分かれて行った研修の報告に充てるという過密スケジュール。ナントモハヤ。

ただし、今日は日本語を使って思いっきり、高齢者福祉を語ろうという企画である。

午前中のレクチャーは訓覇法子さん。数あるスウェーデン情報の中でも、訓覇さんのお書きになったものは、女性の視点からきっちりと書かれていると感じていたので、ある意味では憧れの人でもあります。

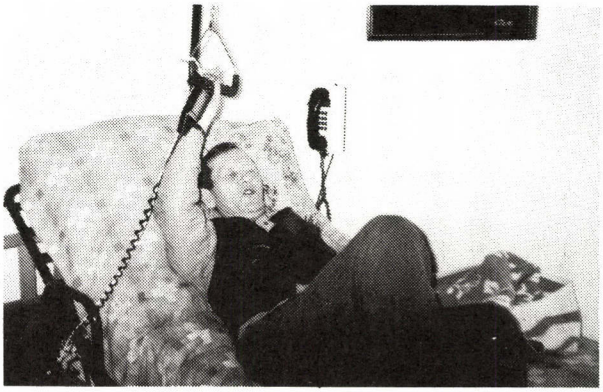
訓覇法子さんのお話

「スウェーデン人はいま幸せか」を書く時は、「日本人はいま幸せか」が頭の中にあった。人が幸せかどうかは、極めて個人的な感覚だから、一概には決めつけられないが、弱い立場にたった時、それを支える社会的支援がきちんと存在しているかどうか。また支援を受ける高齢者や障害者の視点から見ているかどうかが、福祉国家としての要素となっている。目に見える福祉の形でなく、なぜそうなったのかの原因まで考えてほしい。

国家が国民の福祉に完全に責任を持ち、まず第一に安全であること、さまざまな障害に出合った時に安心して生きていける社会をつくることが政治の目的・理念であり、それを支えるものは、平等と連帯、自分らしい暮らしの継続であることを理解して、日本には日本にふさわしい福祉をつくってほしい、と述べられた。

五年前にスウェーデンを訪れた時、私自身の未熟さもあって、毎日どころか、日に何回ものヘルパー訪問や訪問看護があることに、とても驚いたものである。

デイケアセンターやケアハウスもまだ当時の日本にはなく、ただひたすら眩しいものと感心し、シュクヘムを生活の場に、という試みに感嘆し、これらの制度が高齢者と障害者に、ふつうの暮らしと継続性を保障するためという思想に感激していた。



老人ホームのリハビリ風景、キメ細かい工夫が考案されている

その時に比べれば、今の日本にはこれらの名称も施設や制度も、すでに身近に存在し、それほど驚かなくなっている。ただ、それが本当に高齢者の人権を保障する役割を果たす機能を持っているのか、量的に十分なのか、訓覇さんのお話は、そういった私達への、極めてシビアで適切な助言といえるのだろう。

老人ホームの中に美容室があり、気軽に利用されている

シンポジウム

午後からは山井和則さん、高橋たか子さん、馬場寛さんのシンポジウムが開かれた。

高橋たか子さんの縦横無尽の活躍で、お話は女性問題、教育問題、老人問題から環境問題まで幅広く語られ、興味深い反面、私などはぐるぐる廻る渦巻きの中で目を回してしまいそう（詳しくはレポートをお読み下さい）であった。

福祉現場で働いている馬場さんや山井さんから、現実の制度や変化をもう少し聞きたいという思いが残ったが、それぞれの人にとって示唆の多いお話であったと思います。

最後には、日本の現状をよく見据えて、日本には日本独自の福祉のあり方を探って下さい、とのアドバイスでしめくくられました。

シンポジウムが少し延長したのと、三人のパネリストを囲んでの話も尽きず、この後四時から予定されていたA、B、C各班の報告会は、賛否を取り、中止派二一人、やりましょう派一五人で中止になってしまいました。

それでも、昨夜からがんばって準備した人もあり、他の班の報告をぜひ聞きたい、という声もあって、夕食のために出かけた中華料理店・INA・SKEPPSBRONの夕食の時間の中で報告会を持つことになり、各報告者のお話に耳を傾けました。

今夜は、スウェーデン最後の夜、明日は、ワシントンへ向けて出発です。

老人ホームの食堂。職員がレストランのようにサービスをしている

日本人と老い

――心の底に流れる常若思想の認識が必要――

作家　井沢元彦（いざわ もとひこ）

日本の老人問題は諸外国と比べて、かなり難しい問題を含んでいる。

というのは、日本人は「老い」について、他の国の人とは違った考え方をするからだ。

東洋でも西洋でも「長老」というのは尊敬される。たとえば中国は今でも「敬老」の国である。しかし日本は昔からそうではない。政界でも官界でも「長老」が威張っているではないか、という声があるかもしれないが、あれは一部のことで、たとえば町内とか会社とかで「老人」になれば、段々と肩身が狭くなり消え去ることを求められる。「長老」として常に尊敬されて何事も相談されるようなことはなし。

どうしてそうなのかと言えば、これは「神道」のせいなのである。

こういうことを言うと、「冗談じゃない。私は神道なんか信じていない」という人がいそうだが、そういう人でも割り箸は日常的に使っているだろう。しかし、世界中で割り箸を日常的に使うのは日本だけだ。中国、韓国、台湾、香港でも箸は使うが、日本人向けのレストランを除けば、全部洗い箸である。日本人は洗い箸をなんとなく「キタナイ」と思う。この「キタナイ」という感覚が曲者で、これが「信仰」なのである。

これは神道（原始神道）の根本原理の一つ「ケガレ」という感覚だ。日本人にとっては「ケガレ」は敵で、このケガレキヨメるために行うのがミソギである。

そして困ったことに、「老い」もケガレの中に入るのである。だから神道では、古くなった神社を次々に使い捨てにする。

これを常若（とこわか）の思想という。何年かに一度、スクラップ・アンド・ビルドで古いものは追放する。それが日本人の「老い」に対する基本的な考えなのだ。

まず、こういう信仰が日本人の心の底にあるということを認識しなければならない。

すべてはそれから始まる。

〈略歴〉'54年名古屋生まれ。早稲田大学法学部卒業後、TBS（東京放送）入社。'80年『猿丸幻視行』で第二六回江戸川乱歩賞受賞。'85年退社後は執筆活動に専念。

グループ紹介

こんにちは、「高齢化社会をよくする女性の会・Ｗｉｎｇ福岡」です。名称がちょっと長いのですが、歩きはじめてやっと一年です。

県内には大先輩の「高齢化社会をよくする北九州女性の会」がありますが、私たちの会は北九州地区を除く、県内各地で、いろんな立場で活動している女性二〇名程で構成されています。

先日、メンバーのひとりが主催した「宗像地区手をつなぐ女性のつどい」では、樋口代表をお迎えして「二十一世紀をよりよく生きる」というタイトルで講演していただきました。

代表は〝風邪で体調がすぐれない〟とおっしゃっていましたが、いざ始まると、千人余りの聴衆はエネルギッシュな話しぶりに引き込まれ、予定の時間が大幅に過ぎても誰一人として中座することもなく、終わってからの大きな拍手はその満足度をはかるに十分なものでした。

目標は、会員が増え名実とも福岡Ｗｉｎｇに！

高齢化社会をよくする女性の会・Wing福岡
代表　西原桂子

また代表は、夜、別会場で行政主催の講演会。テーマは「サザエさんに見る戦後生活史」でした。樋口代表は「サザエさん」を研究しており、近々サザエさんをテーマに書かれた本を出版予定だそうです。ちらっと聞いただけでも興味津々。期待して待っています。

その講演までの合間に、代表と会員で夕食会をもち、会員相互の情報交換や現場での悩みなどに適切なアドバイスをいただき、有意義な時間を過ごすことができました。

将来、会員がいっぱいに増えて、名実ともに〝福岡Ｗｉｎｇ〟になれるよう、遅々とした歩みながら続けてゆきたいと思っています。

九州でシンポジウムも開きたいですね。他の地区、特に九州各県のみなさまのご指導を期待しています。

（事務局／飯田恒美）

リレー・エッセイ⑦

コレクティブ・ハウジングは理想の館になるか？

東京大学教員
上野千鶴子

落合恵子さんの『偶然の家族』のように、血縁がなくても「家族」というあり方が注目されている。親密な間柄を親子やきょうだいのような血縁のメタファーで呼ぶように、「家族」を求める人間の気持ちには、永遠のものがあるようだ。

血縁によらない家族の住まい方に、コレクティブ・ハウジング（居住共同体）がある。ヨーロッパやアメリカでは、大きな家やアパートに、シングルやカップルやシングルマザーが何組か住んで、食事や子育てを共有している。ほんものの家族と違って、結成も解散も自由。イヤになれば出ていけばいい。

コレクティブ・ハウジングは、「自立した個人の共同体」だろうか？　ほんとうを言えば「自立した個人」はわざわざ居住共同体をつくるまでもない。シングルマザーのように、依存的な他者をかかえて、自立しては暮らしていけない人が、必要に迫られてつくるのがコレクティブ・ハウジングである。

子育てはともかく、老後はどうなるのだろう？　仲良く暮らしていた人たちの間でも、誰かが寝たきりになったり、ボケたりしたら、ふだんは疎遠な親族を呼んだりすると聞く。お互い自立している時には成り立つ友情が、いざという時の助け合いにつながらないのは情けない。

元気なうちは一人ひとりワンルームマンションにでも住んでいればいい。依存的な他者をかかえこんだ時に、はじめて問題になる共同性に、コレクティブ・ハウジングは答えられるだろうか。子のない老後を考えなければならない私には、切実な問題である。

「老後はどうするの？」と迫る友人には、こう答えることにしている。

「子どもがあってもなくても状況は同じ。子どもはアテにならないわよ。」

血縁によらない家族にとって、老人介護こそが真価を問われる正念場である。

＊

（次回は井上治代さんにお願いします）

一九四八年、富山県生まれ。京都大学大学院社会学博士課程修了。東京大学教員。

遥かスウェーデンから本の紹介です

『スウェーデンのグループホーム物語』

バルブロ・ベック・フリス著
ホルム麻植佳子監訳、近澤貴徳・山井和則訳
定価一七〇〇円

本書は、バルツァゴーデンという痴呆性老人向けグループホームの三年間のルポルタージュである。今日スウェーデンではグループホームが痴呆性老人ケアの切り札として、建設ラッシュである。過去五年間の間に一三五〇か所（九二〇〇人分）ものグループホームが建設され、老人病院や老人ホームの一角には必ずと言っていいほど、グループホームが併設されるまでになった。そのグループホームブームのもととなったのが本書である。

バルツァゴーデン（家庭的な雰囲気と優秀なスタッフと、心地よく古風な一〇部屋の住宅）で、八人の痴呆性老人が試験的に新しい形態のグループケアをうけてきた。その結果、驚くべきことに、投薬が減り、オムツの必要がなくなり、痴呆性老人の表情は明るくなった。グループケアにより、痴呆症状がやわらぐことが発見されたのだ。バルブロ・ベック・フリス医師と彼女の仲間たちの画期的な試みを学ぶために、世界中から一万人以上の医療・福祉専門家がバルツァゴーデンを訪れている。

原書の翻訳だけではなく、巻末には私が四〇ページにわたって、解説や私自身のバルツァゴーデン訪問記を書き加え、日本人読者にわかりやすいものとした。

注文は、ふたば書房（☎〇七五―四三二―四一八一）へ直接お願いします。

（山井和則記）

本の紹介

☆全労済シンポジウム報告集☆刊行！

『女性が拓く日本の福祉』（一冊・五百円）
（郵送の場合　一冊・六百円）

デンマーク前福祉大臣オーセ・オールセン女史を迎えての国際シンポには当会からパネラーに袖井孝子氏、まとめは樋口代表、総合司会に沖藤典子氏が出演。コーディネーターは大熊由紀子氏。

充実した内容を分かりやすく編集してあります。グループ活動の教材などとして利用されることをおすすめします。

※お申込は、ハガキ、FAXで当会事務局まで。

事務局だより

★第十二回シンポジウムが、一九九三年九月一日（水）、十回シンポ会場と同じ虎ノ門ホールで行われることに決まりました。みなさまのスケジュールにご記入ください。

★年会費（一九九三年四月～一九九四年三月分）の振込用紙を同封させていただきました。途中入会の方は調整してあります。ご確認の上、お振込みください。振込用紙のない方は領収済です。ご不明の点は事務局までお尋ねください。

★オープンハウスは五月二十四日（月）、午前十一時～午後四時です。多くの方のご参加お待ちしています。

★五月の例会は総会準備と理事会開催のため、お休みさせていただきます。

＊

六月五日（土）の総会でまた、全国の会員のみなさまにお会いできるのを楽しみにしています。

（中島民恵）